

白山ふるさと文学賞

第十二回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生 小説の部 優秀賞

「人生図書館」

美川中学校二年

坂尾<sup>さかお</sup>

玲奈<sup>れな</sup>

人生は「もう一度」が利かない。でも、あの場所に来て本を読むと「もう一度」が利くように感じさせる。そこには、何十億もの本が納められており、選ばれた者しかそこにたどりつくことはできない。今日もオーナーが不気味な笑みを浮かべ、貴方を待っている。きつと貴方にぴったりの生き方を教えてくれる場所、それが「人生図書館」…。

「どこ見て歩いてんだよ。まじ最悪。」

「ごめんなさい、ごめんなさい…。」

ああ、またやってしまった。これだから私は、いつも見下される…。

私「恵南姫奈は今日も失敗をし周りに迷惑をかける。さえない見た目、コミュニケーションのかけらもない引つ込み思案な性格、信頼できる友達はいない。そんな自分を好きになれるわけがなかった。私は、自分が嫌いだ。」

「うわ、かいとまたシンデレラの被害にあってるじゃん。かわいそー。」  
あだ名はシンデレラ。でも「報われないシンデレラ」の略なんだそう。我ながら、ユーモアのあるあだ名をつけられたと思う。いつになっても変わらうとしない私にはふさわしいあだ名だ。

「早く拾えよ。お前が落としたんだろ。」

「すみません、すぐ拾います…。」

「ちよっとかいと！きなちゃんにその言い方はないんじゃない!?!」

そこに現れたのは、同じクラスの美少女、佐野結菜だった。容姿端麗、誰にでも分け隔てなく話す明るい性格、その上周りからの信頼もあつい、いわゆるこの高校のマドンナだ。

「きなちゃん早く拾おう。後でかいとは私が叱っておくから大丈夫だよ。」

「ゆいなごめんってー。」

「あたしじゃなくてこの子に謝りなよ。」

「す、すみませんでした。」

「あっはい…。」

「はい解決！もうおしまいね！」

すごかった。彼女がいると、自然と華やかな香りと空気が広がり、場をおさめ惹きつけるのだ。彼女は何か、地味で話すが上手なわけでもない私になにかと絡んでくる。

「ありがとう、佐野さん。」

「ゆいなで良いのに、気にしないで。」

「ゆいな、さん…。」

「やだ照れてんの？きなちゃんかわいいー。」

そして、いつも私をほめてくる。かわいいなんて言葉嘘にしか聞こえないけど。

いつも彼女と関わり、自分との差を見せつけられているようで少し嫌だった。

お昼のチャイムが鳴ると、みんな一目散で購買、屋上、体育館とそれぞれ場所へ向かう足音で騒がしかった。でも私だけは違って、いつも小さな中庭へ向かう。そこで植物と青い空に囲まれて食べるお弁当が好きだった。自分だけが知っている景色、といった優越感だけが私を引き立ててくれる気がした。

もう冷めきった唐揚げを口に運びかけたその時、私の背後から声がした。

「いたいた、きなちゃん！独りでこんな所で食べてないで、私と一緒にこれ食べようよ。」

また佐野結菜だった。昨日は、男子の持っていた書類を落として助けてもらったっけ。彼女が持っていたのは、購買で一番人気のフルーツサンドだった。パックからふわふわのクリームと落ちそうなくらいぎっしり詰められたいちごが顔をのぞかせていた。

「あれ、クリーム苦手だった？」

そう言って口をとがらせる顔もとてもかわいくて愛らしい。なんでこんなにかわいくて明るい女の子が、わざわざ私に優しくしてくるんだろう。教室には、私より華やかで笑ってくれる友達がたくさんいるだろうに。

その時私の中である考察が浮かんだ。人気者で、かわいい彼女は私を哀れんで優しくしたのではないか。一度疑い出すとその疑念を晴らすことはできなかった。気付いたら私はフルーツサンドを差し出す笑顔の彼女に、こう言ってしまっていた。

「知らない、食べたくもない。」

気付いた時にはもう遅かった。彼女は目を丸くし口をおおった。その顔もやっぱり美しかった。その事実も余計に私の口を早めた。

「何なの私にいつも絡んで。私、貴方に何かしたの？いつもいつもひねくれてて反応も悪くて友達もいなくて…。」

「きなちゃんやめな…。」  
「貴方みたいにかわいくもない私に優しくしてきて！偽善者にしか見えぬ。」

やってしまった、全て言い切った後にそう思った。一度発した言葉は回収できない。私は佐野結菜の顔を見ることができず走って立ち去った。フルーツサンドを握るその手が、震えていたことだけ確かだった。

放課後の私は、激しい自己嫌悪と後悔におそわれていた。昼は晴れていた空も、黒い雲におおわれ雨が降り出した。性格の悪い私に乗っかるように。それすらにも、傷ついた。

「傘、持っていないし。」

私はバス停まで危なげな足取りで走った。バス停を囲むガラスには、いつもに増して不格好な私の顔が反射して見えた。すぐく、不愉快な気分になって、涙が出そうになった。そして、思いのまま私はこう呟いていた。

「ああ…もう、過去に戻りたい。」

その瞬間、足が意思を持ったように全身を立ち上げらせ、なにかに引っぱられるように路地裏の方へ歩いて行った。私は足になされるがまま、歩いた。不思議な引力のようなものが私を建物の前まで動かして行った。たどりついた先に広がった光景は、とても大きな図書館があった。初めて見た場所だったが、そこはずっと昔からあったかのような古びた佇まいだった。扉には、「人生図書館」と書かれたプレートがかかった。不思議な名前、夢で一度見たことがあるようなこの図書館に、私は先程の悲しみも忘れて惹かれた。

「良かったら、ここで雨宿りでもして行かれませんか。」

声が出た方を見ると、入口から素敵な女性が見せていた。ロングでつややかな黒髪、猫のようなつり目、でも服装は普通の司書の格好だったが、何故か違和感が感じられた。女性の言葉のまま図書館の中に入っていくと私は息を呑んだ。

外観からは想像もつかないぐらい高い天井に、数え切れない程の本がずらりと並んでいた。一体、あんなに高い所にある本を誰が取るのだろう。館内には古紙特有の匂いが広がって森のようだった。カウンターには、あの女性とたくさんの本が積まれていた。しかし、ここにある本の全てが、手に取るなど私に語りかけてくるような無言の重圧をかけてくるように感じ、少し怖かった。

そんな中、たくさんの本の中に一つだけ、私を受け入れてくれるような温かな雰囲気を持った本があった。とびつきたくなくなるぐらいに、私は惹き寄せられた。

「あなたが今読むべき本を見つけられたようですね。」

そう言って女性は、本を取り出してくれた。女性が差し出している本には「佐野結菜」と書かれていた。私はこの四文字にひどく動揺し、顔がひきつってしまった。

「これは、佐野結菜様の人生書ですね。あなたに存在を知らせたということは、何か伝えたいことがあるのかもしれないね。ご友人か何

かですか？」

「クラスメイトですけど…人生書って、何なんですか。」

「人生書、というのは人の生まれてから今を記した本です。ここ人生図書館では、その人生書しか取り扱っておりません。」

人の生まれてから今を記した本？何度頭で繰り返しても理解がつかめなかった。今、私が手に持っている結菜の人生書は、結菜の人生をまとめてあるということなのか？少し、プライベートに踏み込むようで悪いことをする気分になった。でもどうしても知りたい。彼女の苦労や、私に優しくする理由。私はためらう気持ちから目をそむけ、本を開き、夢中で読み進めた。

私はずっと姉の新菜にいなと比べられる人生だった。新菜は私の三歳年上で、美人で勉強も習い事だったピアノの才能も光っていた。それに比べて私は、容姿も勉強も才能もパツとせず、だんだん両親から直接的な言葉を言われるようになってきた。失敗をする度「出来損ない」と罵られ、姉は不愉快な笑みを浮かべながらこつちを見ていた。悔しかった。辛かった。だから十二歳の夏、私はある決意をした。姉の新菜を見返す程、自分をみがくと。見た目、勉強、その他も本気で頑張った。苦しかったけどそれでもよかったと今なら言える。

読み終えた私は、結菜の全てを知れた気がした。結菜を傷つけた親の一言一言や、姉からの見下すような嫌味。その一つ一つは私が今まで浴びたクラスメイトからの言葉と似ているものがあつた。そして、結菜の苦労が私を余計にみじめにさせた。変わった結菜と、変わらない私。自分がバカらしく思えた。

結菜に会いに行こう。

「あなたにとって大切なことを見つけたようですね。その本借りて行きますか。」

「借ります。」

気付けば、図書館を出て学校の方へと走った。手には、結菜の人生書が握られている。今の自分にできること、それは結菜に会うこと。あの図書館は不思議で夢のようだった。全世界の人の人生書があるのだろうか。そして私のもあるってこと？誰かが持っていたら？頭から離れない、あの女性の声。私が結菜の人生書を見つけた時も、読み終えて結菜に会いに行く決心をした時も、あの女性はすぐ私に話しかけてきた。あの女性は心が読めるのではないか？そう思うと少しゾッとした。

そんなことを考えていると、学校がもう目の前だった。結菜、お願い。まだ帰っていませんように…！そう思い、私は玄関のロッカーに結菜の靴があるか探しに行った。しかし、結菜のロッカーには内ばきズックしか入っていなかった。

落ち込む気持ちを無視して、結菜の背中だけを探し求めて、バス停へ走った。きつと今の自分は、長時間雨に当たってひどい顔をしているだろう。でも今はそんなことなどどうでもよかつた。何気なく自分の手に目をやると、握りしめていたはずの結菜の人生書がなくなっていた。走っている途中に落としてしまったんだ。もし、同じ高校の人や今の結菜を知る人物に見られたら、結菜は…。

「きなちゃん!!これ落としてる!!」

「ゆいな…!!」

いつものような、明るく澄んだ声ですぐわかつた。今自分が一番求めている人だと。

「この本、何で私の名前が書いてあるの？しかもそれを何できなちゃんが持つてるの？」

「それ人生図書館ついでとこで借りた本で、佐野さんの人生が細かく書いてある本で、それで…その…勝手にごめんなさい。そして、ひどいことを言ってしまったって本当にごめんなさい、ってこんな私が謝って

も許してくれませんかよ。」

「うわ!!読まれちゃったかあ。もう知っちゃったから仕方ないよね。いいよいいよ!」

「佐野さんの苦勞も知らず私過去に戻りたいなんて努力もせずに言っちゃって…本当ひどいですよね。」

結菜は黙って、あいづちを打ちながら下手な私の話を聞いてくれた。私が話終わった後、少し考えたような表情を見せてから、結菜は口を開いた。

「あのね、きなちゃん。もう過去には戻れないけど、過去の自分より良くなることはいくらでも可能なんだよ!」

そう言う彼女の顔は笑っていた。やっぱりその笑顔も美しい。そしてまた、

「え!?もしかして名言誕生しちゃった!?!」

とおどけて笑っていた。私も努力して変わって、結菜のように笑える日が来るのかな、と思わせてくれるような素敵な笑顔だ。

「あ、じゃあさ。明日の放課後私もその図書館連れてってよ。どんなとこか気になる。」

「ゆいなの為なら連れてってあげるね。」

「あっ今ゆいなって呼んでくれた!しかも笑ってる!やっぱりきなちゃんも笑ってる方がかわいいよ。」

今日の結菜がくれた「かわいい」は、心の底から嬉しかった。この子と、友達でいたい。

「ありがとう…明日本当に楽しみにしててね。すごい不思議な場所だよ。」

「おもしろそう、楽しみにしてるよ!」

自然に交わす会話の一言一言が嬉しかった。私達は、新しい自分へと生まれ変わる為に、歩いて行った。

人生図書館は彼女に変わることを教えてくれた。誰かの人生書を読んで、どのように進むかは貴方の動き次第だ。この文を読んでいる貴方には、どんなことを教えてくれるのだろうか。今日も明日も明後日も、あの図書館には今の生き方に悩める人々が引き込まれていく。今の貴方に必要なことを、本で教えてくれる。

